

〈2021～2030年度〉

自然と調和して生きる世界



2030年 10年後のありたい姿

- 地球環境の保全・再生、温暖化防止への貢献
- 自然災害のリスクや被害の軽減に貢献
- 国や民族、宗教などの違いを理解し、共に助け合う社会づくりへの貢献
- SDGs達成に向けた行動の促進、パートナーシップの推進に貢献



③ 持続可能な地域開発事業の実施

地域の課題やニーズに応じた緑化や環境教育、循環型有機農業などの社会開発等の実施

④ 持続可能な農業研修の推進と普及

国内3カ所の研修センターでの、海外研修生への有機農業・環境・食をテーマとした研修を通じ、帰国後、各事業の推進役となる人材を育成

② 共に生きる社会づくりのための技能実習生の受け入れ

技能実習制度の目的である「各国の産業発展へ貢献し得る人材を育てること」を基本とし、日本と出身国を結ぶ懸け橋となることを目指し、実習生、日本社会、出身国社会すべてに恩恵がある受け入れ体制を確立

③ 持続可能な地域開発事業の実施

10年で300名を育成

中部日本(愛知県)・四国(香川県)・西日本(福岡県)の各研修センターで実施する研修に、各国から10年で300名を受け入れ、帰国後にそれぞれの国で進む取り組みを担う人材となるよう育成します。また、食の安心安全へのニーズに応える農作物生産・加工・販売の6次産業モデルを学べる質の高い研修を目指し、研修生が経費を自己負担で参加する仕組みを構築していきます。

② 共に生きる社会づくりのための技能実習生の受け入れ

10年で3,500名の受け入れ

オイスカは、技能実習生の受け入れ事業を、「実習者・日本社会・出身国社会それぞれにとって恩恵をもたらす互恵的国際協力」と位置付けて取り組んでいます。入国前後に最長4カ月の基礎研修で日本語、日本文化、規律、作法など日本社会で活躍できる基礎を学び、実習中も定期巡回をして心のケアをするオイスカ流の受け入れと、同業他社との明確な違いを主張し、事業のブランド化も図り、10年で延べ3,500名の受け入れを目指します。

創立60周年にあたって発表した10ヵ年計画は、国連の持続可能な開発目標(SDGs)が達成期限としている2030年と期間が重なっており、その達成に向けた貢献も目指しながら活動していくこととなります。

オイスカが実現したい未来として掲げる「人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、

自然と調和して生きる世界」を持続可能な形で築くため、社会課題解決アプローチとしてEBS(自然を守り育み、その力を活用した取り組み)とBBS(ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシャルビジネス)の2つの柱を中心に活動を進めていきます。計画の一部を、数値目標を加えてご紹介します。

オイスカ10年計画

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、

2021年 地球規模課題

- 地球環境の劣化
- 地球温暖化
- 多発する自然災害
- 生物多様性の減少
- 食の安全への脅威
- 若者の農業離れ
- 農村部の過疎化
- 貧困層の拡大
- 環境教育、SDGs教育の遅れ
- 社会の分断と対立

SDGs「行動の10年」

- パートナーシップの強化

重点活動

BE the SOLUTION!

2つの社会課題解決アプローチ

EBS (Eco-System based Solution)

自然を守り育み、その力を活用した取り組み

① モデル緑化事業の推進

蓄積した技術とアイデアで緑化を推進。国際機関や現地政府・NGO等への波及を狙い、情報発信、連携力を強化

② 青少年との地域課題への取り組み(「子供の森」計画)

学校での緑化を通じた環境教育に加え、地域課題解決への取り組みを強化。モデル活動を見出し、世界各地のプログラム参加校へノウハウを発信

BBS (Business based Solution)

ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシャルビジネス

① ソーシャルビジネスの推進

日本と世界を結ぶオイスカの人的ネットワークを活かしたソーシャルビジネス連携の展開



コロナ禍で学校に行けなくても家庭や地域での植林を進めるなど、地域の状況やニーズに合わせ、柔軟な対応ができるのが「子供の森」計画の強みの一つ

① モデル緑化事業の推進

10年で50,000haの緑化

オイスカがこれまでの経験から確立してきた技術やノウハウを広く提供し、さまざまなセクターと連携を図りながら50,000haの緑化を目指します。成長した森が防災・減災の機能、いわゆるEco-DRRとしての役目を果たすよう管理を続けていきます。

※特に力を入れていくウズベキスタンの沙漠緑化プロジェクトについては次ページにて紹介

② 青少年との地域課題への取り組み(「子供の森」計画)

10年で累計50万人の参加

現在、累計37の国と地域、5,343校に活動が広がる「子供の森」計画。学校を拠点とした緑化や環境教育に加え、防災・減災や安全な食の確保、水の保全などといった地域ごとの課題に対し、EBSを主軸としたアプローチで自ら行動できる青少年や指導者の育成を促進。効果的な運営を図るため、重点国を定めながらも、モデル活動の波及効果により、10年間で青少年50万人を巻き込み、新規に参加する国を5カ国増やすことを目指します。

取り組み事例

ウズベキスタンの沙漠緑化プロジェクト 10年計画

10年で40,000haの沙漠を緑化

ドローン播種や漢方薬となる生薬栽培などを掛け合わせ、アラル海湖底を緑に！日本のプレゼンスを高める、大きな意義のある壮大なプロジェクトを目指します。



かつて、世界第4位の大きさを誇る湖だった「アラル海」。

中央アジアのカザフスタンとウズベキスタンにまたがるその湖は、現在では、面積が5分の1以下にまで縮小し、干上がってしまった面積は約540万ha（九州地方の約1.2倍）。原因は、綿花栽培による過剰な灌漑や温暖化による気温上昇などと言われています。湖底の土壌は、塩分濃度が高く、粒子が非常に細かい沈泥土壌（シルト）で、風が吹くとすぐに舞い上がり砂嵐を発生させやすい性質です。頻発する白い砂嵐は、周辺住民数十万人に健康被害を及ぼし、心肺系・血液系の疾患が風土病として蔓延している状況です。

アラル海の緑化のこれまで

ウズベキスタン（以下、UZ）政府林業局も緑化に取り組んできましたが、沙漠化の進行を食い止める規模で植林を展開するだけの資金確保ができませんでした。

2014年、UZ政府や現地の研究者が、中国・内モンゴルのオイスカ阿拉善沙漠生態研究センターでの富樫智所長の取り組みに注目。内モンゴルでは、高価な漢方薬の原料となるニクジュヨウを人工的に灌木の根に寄生させる方法を開発したことで、住民が現金収入を得ながら、主体的に植林に参画するようになり、緑化の拡大に成功していました。ニクジュヨウの栽培をしながらの植林が軌道に乗った。

2009年、中国政府林業局がオイスカ方式を採用。オイスカが20年かけて2000haに植林したのに対し、政府は単年度（18年度実績）だけで17・5万haの植林を実施するなど、飛躍的に緑化が進み、住民の生計向上にも役

立っています。

こうした動きを知ったUZ政府は、オイスカ方式の採用を希望、連携への道を探り始めました。

国・大学・オイスカとの協働が始動

14年から富樫所長が内モンゴルからUZに通い、調査を開始。カウンターパート探しや試験的な植林などを繰り返し、日本からはオイスカ愛知県支部光岡保之会長が代表を務めるグリーングラスロツツが支援を続けてきました。また、林野庁からの受託事業としてニクジュヨウ市場を調査し、状況把握に努めてきました。そして20年、UZ政府、カラカルパクスタン農業大学、オイスカとの協働により、アラル海湖底での試験的緑化がスタートしました。

今後の展望

2〜3年かけてアラル海湖底で100haの試験的植林を行った後、次のステージへ移行します。

■第1フェーズ **モデル緑化**
トラクターでの植林とドローンを使った播種で1千haを緑化。ニクジュヨウの人工寄生、土壌の肥沃化にも取り組む。

■第2フェーズ **本格緑化**
面積を4万haに拡大し、本格緑化を展開。

■第3フェーズ **広域緑化**
10年計画終了後に向け、政府などへプロジェクトを移管。政府を中心に協働で100万ha規模の緑化を目指し、風土病の改善に向けた取り組みをサポート。

ここがポイント！

干上がった湖底の平均Phは9という、極度の塩分濃度。しかし、灌木であるサクサウルは自生しており、マングローブ同様、葉から塩分を出すことで樹木内の塩分濃度を調節していると考えられています。対象地は年平均降水量が100mm以下ですが、湖底ということもあり土壌湿度が高いこと、さらに冬に降雨（雪）があるため、春の発芽、樹木の生長が可能です。また、湖底の土は粒子が非常に細かいため、風が吹くと種の上に土壌が被り、発芽しやすい条件を作り出すことから、苗でなく種を播く方法でも発芽・活着が期待できます。

公益財団法人オイスカの

理念体系

Vision

実現したい
未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、
自然と調和して生きる世界

私たちが目指すのは、それぞれの民族が対立することなく、共に助け合い、人間は、母なる地球のいのちの循環の一部であることを認識し、いのちの源である太陽や水、空気や土が永く未来にわたって守られ、すべてのいのちが健やかに生きる世界です。



Mission

日々果たすべき
使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、
感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、
共に助け合う社会づくりに取り組みます

私たちは、人間も母なる地球のいのちの循環の一部であることを認識し、すべてのいのちが生き生きと輝き、健やかに守られるよう、「感謝」の心を持つ「人」を育み、水や土、植物や動物、人間の生活の土台となる森づくりや、あらゆる困難を共に乗り越え、助け合う社会づくりに取り組みます。



互いを理解し尊重

オイスカの活動の基本は、それぞれの民族が持つ歴史や文化、宗教などの違いを理解し尊重する相互理解、相互尊重の精神を土台に据えた“相互協力”です。その上で技術を伝えなければ、技術という種は、決してその地に根を張ることはありません。

Value

私たちが大切に
していること

土から離れない

大自然の摂理に基づく土づくりから始まる環境保全型農業を通じて「人」を育み、農村開発などの実践を通して大地の恵みの尊さ、自然と共に生きることの大切さを共有します。大地の恵みに感謝する心は、農業に限らずすべての行動に共通しています。

感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む

人間が大自然の中で生かされている存在だと自覚し、すべてに感謝し、恩返しをする心を養い、何事にもへこたれない「人」を育てていきます。単なるノウハウや技術の伝達にとどまらず、共につながり合うことで、苦難にもへこたれない心が育ちます。

地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

課題に向き合い、解決に向けて立ち上がるよう、一步を踏み出そうという意思に寄り添い、よく話し合いながら、その土地の実情に合った方法で、手を携えて地域づくり、国づくりを進めることがオイスカのモットーです。



Spirit

Visionを達成する
ために、私たち
一人ひとりが日々
実践する
心のあり方

- ① 先を展望する想像力を持つ
- ② 着実に一步ずつ積み重ねる
- ③ 仲間とともにチーム力を発揮する
- ④ 挑戦し続ける
- ⑤ 経験から学び進化する
- ⑥ 感謝の心を持つ
- ⑦ 真摯である
- ⑧ へこたれない
- ⑨ 人間味にあふれ、楽しみながら!

60周年記念国際シンポジウム〈レポート〉

BE the SOLUTION!

～世界課題の解決に風穴をあける～

2021年10月6日に東京都内で開催した60周年記念国際シンポジウム。これまで節目ごとに開催してきた記念式典とは、全く違う演出がなされました。スタッフが企画から当日の運営まで手づくりで築き上げた行事の舞台裏をお見せしつつ、当日の様子をレポートいたします！



言葉一つの使い方も悩みに悩み、何度も原稿を書き直して当日に臨みました。イベント後、ある方から「森本レオかと思った!」と言われました(笑)

長宏行
(海外事業部調査研究担当部長)

イベントのキャッチコピー「BE the SOLUTION!」は、私のアイデアが採用されました!
マリア・グラゼン・アセリット
(啓発普及部主任)



「アップル社のスティーブ・ジョブズ氏のプレゼンテーション、あるいはアメリカのTEDカンファレンスのような演出で発表したい」

あるスタッフのそんなひとことから、シンポジウムの冒頭の発表部分は「TED」と呼んで準備を進めてきました。

当日14時の開演と同時にステージが暗転。スポットライトの中に浮かび上がった長部長が「世界は急激に変化しつつあります」と語り出しました。主催者挨拶も来賓紹介もない、「TED」でのスタートとなりました。



当日は舞台袖で映像を映す担当でした。一瞬たりとも気が抜けず、大変でした。開始前、舞台に置く椅子やマイクの位置にテープを貼るチームがテキパキ動いていました。「バミリ隊長」の長野さん、カッコよかったです!

倉本有沙(広報室)

舞台裏では……





おうちまで
OISCAの
畑と森の恵みをお届けします!

特別キャンペーンも



国内研修センターの畑からの恵みのほか、国内外の森づくりなどの取り組み中で生まれた産品をお届けしようと、期間限定で注文を受け付けました。たくさんの方にお申し込みいただくことができました。ご注文くださった皆さん、ありがとうございました!

野木麻美(啓発普及部主任)



オイスカは本当に多くの会員・支援者・ボランティアの皆さんに支えられていることをお伝えできたと思いますし、私自身、そうした皆さんの思いに触れることができ、これまで以上に責任をもって仕事に取り組んでいこうという気持ちになりました。

大垣直哉(海外事業部)



トークセッションでは、法人会員の企業・団体による取り組み事例と、個人会員のオイスカ活動への関わり方の事例を紹介。労使で国内外のオイスカ活動を支援している住友化学労働組合、技能実習生をこれまで100名以上受け入れているトヨタファーム、オイスカ・ミャンマーと連携した農産物生産事業を展開している全笑の代表者が登壇し、それぞれの取り組みを紹介。また、「海岸林再生プロジェクト」のボランティアとして、年間2千人のボランティア受け入れの対応に当たっている宮城県支部会員の大槻壽夫さんが活動への思いを語りました

60周年記念行事を終えて

気候変動などへの対応として「パラダイムシフト」が求められています。2018年の名取市でのEco・DRR(生態系を活用した防災・減災)研修を皮切りに、国内外の仲間と共に議論を重ねてきました。

この10年、海岸林の再生に助言をいただいている太田猛彦東京大学名誉教授(財団顧問)は、「オイスカは60年前からSDGsに取り組んでいる。次の10年は大胆にバックキャストイングでモノを考えよ」と強く背中を押してくださいました。及第点とは言えませんが、今の私たちの全力を尽くして表現したつもりです。聴講くださった識者の方々からお聞きしたコメントを紹介させていただきます。

◎「SDGsが広く知られるようになり、軽く扱われるようになったと感じるが、真髓を知ってもらい、重く受け止められるようにするのもオイスカの役目。その意味において、EBSとBBSはマッチした戦略。他団体とは異なる、唯一無二のNGOだと感じた」

◎「企業人3人のスピーチに感

動した。特に技能実習について、制度が始まるはるか前から海外の青年に養豚の技術指導をしてきたトヨタファーム鋤柄代表の話で、負のイメージが変わった。実習生の実像を多くの市民は知らないが、オイスカは知っている。こういう発表の機会を全国でつくってほしい。日本で働く外国人への印象が変わり、仲良く助け合う関係を築けるようになると思う。日本で働いてくれて、ありがとう」と言える日本人でありたいと感じた」

◎「まっすぐな団体であることが分かったが、内部の葛藤をもっと出してもよかったのではないかな。オイスカの生き方は重く、責任も重い。今後も貫いてほしい」

◎「ビジネスについて明言したこと一番共感した。NGOでもそのような考え方ができるんだと、新鮮で、インパクトがあった。長期計画は誤差が出るもの。修正を重ねていけばよい」

以後も現場第一主義で、実行あるのみ。一歩ずつ努力を重ねます。へこたれませんが、

GSM担当部長 吉田俊通

——長く準備に時間をかけて
いただいた「まことのちから」
(以下、著書)がようやく出版
を迎えた。ご苦労も多かった
のでは？

10年ぐらい前に財団の中野
利弘顧問から創立者中野與之
助翁が広く世の中に伝えよう
としたことをまとめてもらい
たいと言われたことから始ま
った。個人的にも中野與之助
(以下、中野)という人物に
は興味を持っていたが、本が
出版されているわけでもなく、
どう取り掛かっていいかわか
らなかった。ある時、オイス
カの設立母体である国際文化
交友会が運営する月光天文台
を訪れた際に、中野が書いた
という本を見つけたことで道
が開けた気がした。『霊界から

見た宇宙』と『宇宙大精神』
の全13巻。ただ、中野の著作
とは言いながらも実際には口
述筆記と思われ、主語が明確
でない文章なども多く、すべ
て読破したものの理解にはい
たらず、2回目を読み終えて
ようやく少し分り始めたとい
う感じだった。

——中野が育った時代背景な
どが盛り込まれているのを興
味深く読ませてもらった

中野という人は時代と思直
なまでに向き合った生き方を
してきたと感じる。中野に関
する著述では、岩という子分
の言葉で一念発起した件が必
ず出てくるが、実際にはそれ
が直接の原因ではないと思う。
著書にも書いたが、明治20年

生まれというのが一つのキー
ワード。著書で言及した同年

生まれの生き方に共通するの
は、戦争をいくつも体験し、
戦中・戦後がどういうものか
を一番知っていて、そして、
先の戦争に大きな責任を痛感
しただろうということ。軍人
は自裁することで責任を取ら
うとしたし、政治家や思想家
たちのその後の生き方に「な
ぜ日本はこんなふうになって
しまったんだ」ということへ
の解答があり、その中に中野
も生きてきた。オイスカを作
る土台にもそれがあつた。そ
れと、中野が育ったのが「焼
津」という土地だったことも
重要な点。外に出ていこうと
か海外との結びつきといった
意識がここで育まれたことと

も重なるのではないかと感ず
る。

中野は戦争が終わってから、
三五教さんごきょうという宗教団体を立ち
上げていたため、これがオイ
スカの母体であるかのように
思われ、オイスカも宗教団体
だと疑いの目を向けられるこ
とも多いように思うが、そも
そも世の中の人が考える「宗
教」は中野に言わせれば宗教
ではない。中野にとつての宗
教とは宇宙の仕組みを解くこ
とでしかない。万教帰一ばんきょうきいつし、
世界平和を作るのが中野の理
想だった。だから、あの貧し
い時代に海外からたくさん
の宗教家を集め、8回もの国際
会議を開いている。ただ、自
分の主義主張の正しさばかり
を説く人々の姿を見て、この

人たちではどうにもならない
と感じた。宗教家と称する人
たちのエゴイズムのいやらし
さを身にしみて感じたのだと
思う。そこで大転換を図るこ
とになった。宗教家を変える
ことで世界を変えるのは不可
能だと考えて、一般人が力を
合わせて世の中を変えていく
ことを求めた。それがオイス
カに結びついたのではないか。
だからオイスカを立ち上げて、
最初にやった活動も単なる援
助、つまり富める者が貧しい
者を助けるという発想ではな
かった。田舎で農業を営むこ
と普通のおじさんたちをイン
ドに派遣して、ごく普通に現
地の人と一緒に農作業で汗を
流しながら、共に助け合っ
て、お互いに意思が通じ合うこと

まことのちから

中野與之助の生涯とオイスカ

まことの
ちから

中野與之助の生涯とオイスカ

樋泉克夫

大自然のバランスを、
今こそ取り戻せ!

宇宙を読み解き、大自然と人との
かわりを究めた中野與之助。
その哲学と行動の先に
国際協力組織・オイスカが誕生した。



昨年12月、公益財団法人オイスカの理事を務める樋泉克夫氏が一冊の本を上梓した。
 中野與之助翁が歩んだ人生を、その時代背景と共にたどり、翁の思想を紐解いている。
 いかにしてオイスカが誕生したのか。また、オイスカのあるべき姿を問う『まことのちから』。
 著者である樋泉克夫氏に話を聞いた。

で、世の中が安穩になつていくという実践だったのでないか。そうした人たちの働きを通して、中野は自分の考えを伝えていこうとしたのではないか。

——この著書は、時に難解とも思える創立者の考えを翻訳したものと考えてもよいか
 まさにその仕事をしたと思つている。間をとりもつことはとても大事なことです。著書の中でも解説したが、三五教の「あなない」も「結びつける」という意味を持っている。縄を「なう」がイメージしやすいかもしれない。私の出身の山梨では畑を「なう」というが、これは土と肥料と空気を混ぜ合わせていくから「なう」というんだと気がついた。中野の考えと人とを結びつける行動は、オイスカの外にいる人間の仕事かもしれない。それよりもまず、オイスカの中にいるスタッフにはもつと

学んでもらいたい。中野は人間の体は地球だと言っている。抽象的な説明しかなく、最初はなんとアホなことを、と思つたが、最近の研究では人間の体の成分と宇宙の成分が同

じだということが分かつてきている。中野は人間の体は小さな宇宙だとも言っていて、そうした考えは、最新の宇宙に対する考えに沿っていると思える。そのことをオイスカ



「宇宙大精神」「霊界から見た宇宙」のほかにも膨大な資料から中野の思想を掘り起こした

のスタッフはよく理解して、前面に出して訴えていくべき。COP26でもさまざまな話し合いがなされたが、みんな自分の体の外のことを話しているに過ぎない。地球が直面していることを、自分の体の中に起こっていることとして考えたらもつと真剣になるはず。環境問題というのは、自分が熱を出している、指が痛くて骨が折れているかもしれないし、そのまま壊死してしまうかもしれないということ。
 60年以上前に、宇宙と地球と人間が同じであるという発想に立って中野が考えていたことを理解するのは難しいが、その生き方を学ぶことで考え方を理解できるようにするのはないか。文字で追体験することで多くの人が中野の生き方、そして思想への理解を深めてくれることを願っているし、その助けになるよう、講演会などを全国で展開していきたい。

樋泉克夫 (ひいずみ・かつお)

愛知県立大学名誉教授。
 (公財)オイスカ理事。1947年、山梨県生まれ。香港中文大学新亜研究所、中央大学大学院博士課程を修了後、外務省専門調査員として在タイ日本大使館に勤務。愛知県立大学、愛知大学の教授を歴任し、現在に至る。中国関連の著書・論文多数。



書籍概要／購入のご案内

「まことのちから 中野與之助の生涯とオイスカ」

四六判上製・本文296頁／定価 2,200円+税
 出版社 清流出版

オイスカの全国支部、Amazonで
 ご購入いただけます

お問い合わせ：(公財)オイスカ 広報室 oisca@oisca.org

